論文の和文要旨

論文題目	現代日本語における接続助詞を用いた中途終了型発話文の記述的研究 －中途終了型発話文「～て。」の文法的特徴及びその意味・機能－
氏　　名	張　季媛（チョウ　キエン）

本論文は、現代日本語の中途終了型発話文「～て。」（以下「～て。」とする）を対象とした記述的研究である。「～て。」は、接続助詞を用いた中途終了型発話文（以下「中途文」とする）の中では、その使用数が多いにもかかわらず、同じく使用数の多い「～から。」、「～けど。」とは異なり、これまで先行研究では詳細に考察されることの少なかった中途文である。

本論文の考察対象とする「～て。」は、「課長は今ちょっと席を外しておりまして。」のように、形式上、主節が現れず、接続助詞「て」で終わる表現である。なお、本論文では、「今借りてる部屋すごく広くてさ。」「まだ慣れてなくてね。」のように、「て」の後ろに「さ」「ね」等の終助詞が付されるものも考察対象に含めて扱う。

本論文は、この「～て。」の文法的特徴、及び意味・機能を、言語事実に基づき、詳細に分析・記述することを目的としている。主に現代日本のテレビドラマ、及び『日本語日常会話コーパス（モニター公開版）』（国語国立研究所）から用例を収集し、観察・分析を行った。これまで、先行研究では明確におさえられていなかったが、「～て。」と、複文の従属節として用いられた「～て」（「風邪をひいて、会社に行けなかった。」の下線部分にあたるもの、以下「テ節」とする）との対応関係についても、詳細に検討を行った。そして、これらの分析を通して、「～て。」の全体像を明らかにした。

本論文は、第Ⅰ部序論、第Ⅱ部本論、第Ⅲ部結論の3部から構成される。

第Ⅰ部　序論（第1章～第4章）

第1章では、本論文の目的と研究対象、本論文の研究対象とする範囲、本論文におけるデータ収集の対象、本論文の構成、及び本論文において使用する用語について述べた。

第2章では、本論文に関わる主な先行研究について批判的に検討した。

第3章では、第2章において検討した先行研究を踏まえ、本論文における解決すべき研究課題を整理した。

第4章では、本論文における考察データの詳細、データ収集の手順、及びデータ収集の注意点など、研究方法について記述した。

第Ⅱ部　本論（第5章～第8章）

本論は、本論①と本論②から構成されている。本論①は考察の前提ともなる部分である。本論②は、本論文の中心的な部分である。以下、本論の各章で明らかになったことを要約する。

（Ⅰ）本論①　＜考察の前提となる分析＞：第5章

第5章では、計31の接続助詞を用いた中途文について、現代日本のテレビドラマから収集した全1,452例のデータに基づき、その出現状況を見た。観察の結果、全ての接続助詞が中途文として現れるわけではなく、用いられる接続助詞の中にも違いがあることがわかった。その違いは、それぞれの接続助詞が複文の従属節として用いられた際の従属度の違いに帰因する。具体的には、中途文として成り立つことができる接続助詞は、ほぼ南（1974）における分類のC類或いはB類のもの（従属度の低いものと、中間的なもの）であることがわかった。そして、A類（従属度が高いもの）の接続助詞の中で中途文として現れ得るものは、「て」以外には見られなかった。

また、接続助詞を用いた中途文の述語的部分に着目し、そこに現れる要素からその形式的特徴を見た。その結果、これらの接続助詞が複文の従属節として用いられる場合と、中途文として現れる場合とでは、「ノダ」との共起に違いが見られた。中途文には、名詞化する機能しか持たないスコープの「ノ（ダ）」（「参加するのなら、きちんと準備してください。」）は現れず、対事的或いは対人的な表現態度を持つムードの「ノダ」（「もっと話したいのだけど。」）しか現れない。このことは、中途文が独立文との平行性を持つという先行研究における指摘と一致することとなった。

（Ⅱ）本論②　＜「～て。」に関する考察＞：第6章～第8章

本論②では、現代日本のテレビドラマ及び『日本語日常会話コーパス（モニター公開版）』（国語国立研究所）から収集した計2,638例の「～て。」に基づいて考察を行った。

(1)「～て。」とテ節との対応関係：第6章

第6章では、テ節の従属度（南1974）、及びテ節の意味・用法という2つの観点から、「～て。」とテ節との対応関係について考察を行った。考察の結果、「～て。」には、南（1974）による分類のA、B、C類のいずれの類とも対応するものが見られるが、それぞれの類と対応するものの出現傾向に差があった。すなわち、B類のテ節と対応する「～て。」が2,494例と最も多く、全体の9割以上（94.54%）を占めるということがわかった。次に、C類と対応する「～て。」は93例（3.53%）であった。最後に、A類のテ節と対応する「～て。」は51例で、全体の1.93%のみであった。

また、「～て。」と対応するA、B、C類のテ節については、それぞれどのような意味・用法を持つのかを明らかにした。まず、「～て。」と対応するA類のテ節には、「述部に現

れる動詞は意志性が弱い」という共通の特徴があることがわかった。

次に、B 類のテ節のうち、「原因・理由」、「継起的な動作・状態」、「前触れ」という 3 つの意味・用法を持つテ節、及び「主節が想定しにくい」テ節が「～て。」として現れ得るということがわかった。複文におけるテ節の中では、「継起的な動作・状態」を表すもの（「図書館に行って、資料を調べた。」）が最も多いとされる（仁田 1995：104）。しかし、本論文で収集したデータを観察すると、「～て。」に対応するテ節の中では、「原因・理由」を表すテ節（「忙しすぎて、実家に帰れなかった。」）が最も多く、計 2,107 例あり、全体の 8 割近く（79.87%）を占めるということがわかった。一方、同じく B 類のテ節であるが、「並列的な動作・状態」を表すテ節（「このリンゴは青くて、大きい／小さい。」）に対応すると考えられる「～て。」は 1 例も見られなかった。それは、主節部分がなければ、並列するもう一方の動作・状態を示すことがそもそもできず、意味的に、「～て。」のみで並列的な動作・状態を表すということは考えにくいためと考えられる。

最後に、C 類のテ節、すなわち「並列的な節の接続」を表すテ節（「姉はバリバリ仕事をしていて、妹も自分のペースで穏やかな生活を楽しんでいる。」）は、まとまった意味を持つ独立した文と見なしてよい表現であるため、「～て。」として現れ得ることは妥当であると考えられる。

(2)「～て。」の文法的特徴：第 7 章

第 7 章では、「～て。」の述語的部分に着目し、そこに現れる表現を品詞、及び意志性という 2 つの観点から整理した。

まず、品詞別に整理した結果、動詞述語は 2,460 例と、全体の 9 割以上（93.25%）を占めることがわかった。特に、「言う」と「思う」の出現数が、動詞述語においても、また、「～て。」の述語的部分に用いられる語の全体においても多かった。「言う」と「思う」が「～て。」の述語部分に現れる表現の中では、それが引用表現の形として用いられるもの（「一人暮らしが寂しいなあって言って。」「最後まで頑張らなきゃと思って。」）が多かった。

また、名詞が述語部分に現れる 91 例の「～て。」のうち、「 - ではない」という否定形をとるもの（「いや、そういう話じゃなくて。」）が 86 例あり、高い割合(94.51%)を占めている。84 例の形容詞述語の中では、属性形容詞が現れるもの（「夏は虫が多くて。」）が 70 例あり、高い割合（83.33%）を占めている。形容動詞が「～て。」の述語部分に現れるもの（「人を説得するのが得意じゃなくて。」）は 3 例（0.11%）のみであった。

次に、意志性という観点から、「～て。」の述語的部分に現れる表現を整理した。その結果、「～て。」の述語的部分には、無意志性のもの（「たまたま行った公園にブランコがあって。」）が極めて高い割合を占めているということがわかった。意志性の述語を持つものについても、述語的部分だけではく、その「～て。」という表現の全体を観察すると、そこに意志性が見られないもの（「先週、パリから戻ってきて。」）も見られることがわかっ

た。この考察結果は、「～て。」に対応すると考えられるA類のテ節には、「述語的部分に現れる表現は意志性が弱い」という共通の特徴があるという第 6 章の考察結果と矛盾しない。

(3)「～て。」の意味・機能：第8章

第8章では、「～て。」の意味・機能について考察を行った。その結果、先行研究で指摘されている「事情の説明」と「感嘆」という2つの意味・機能のほかに、「～て。」には、「情報の確認」という先行研究において取り上げられていない第 3 の意味・機能があると考えられることがわかった。また、先行研究が「感嘆」を表すとしている「～て。」は、基本的に「事情の説明」を行うとともに、「感嘆」の意味・機能も同時に果たすものであると考えられることが明らかになった。これらの考察結果から、「～て。」は以下の3つの意味・機能を持つものであると考えられる。1つめは「事情の説明」のみを表すタイプ（「自分で決めたことだから、最後まで頑張らなきゃと思って。」）である。2つめは、基本的に「事情の説明」も行うものであるが、文脈上の内容事態及び文脈外の常識などの情報との関係づけを通し、「感嘆」という意味・機能も加わっているタイプ（「また余計なことを言っちゃって。」（この例は、「感嘆」の中の「陳謝」を表すものである））である。

3 つめは、「情報の確認」を表す「～て。」（「留学先は大好きなパリじゃなくて？」）である。これは上昇イントネーションを伴って疑問の形で発話される表現であり、話し手が、既に文脈により推測できていることについて、会話の相手に確認を求めているものである。話し手による推測と話し手が把握している情報や常識などとの間には認識のギャップがある場合が多く、話し手の発話に軽い驚きを伴う場合が多い。

第Ⅲ部　結論（第9章）

第9章では、本論文で明らかになったこと、本論文の意義、本論文の限界、及び今後の課題について述べた。本論文では、「～て。」の全体像を明らかにするにあたり、まず、中途文として成り立ちやすい接続助詞と成り立ちにくい接続助詞の特徴を、複文の従属節の従属度という観点から解明した。また、「～て。」と複文におけるテ節との対応関係を詳細に見ることにより、「～て。」に対応すると考えられるテ節と対応しないテ節について、それぞれどのようなものがあるのかを明らかにした。そして、「～て。」の述語的部分に現れる表現の文法的特徴を、その品詞及び意志性という 2 つの点に注目することにより、言語事実に基づき明らかにした。さらに、「～て。」の現れる文脈とその発話を詳細に観察することにより、「～て。」の意味・機能をより詳細に記述することができた。今後、終助詞の付加に着目した分析を行うこと等が発展的課題として残されていることを指摘した。